

1. 部門目標

千葉県保健医療計画に示される千葉市の地域小児科センターとしての役割を担うべく、小児救急拠点病院として充実を図り、小児総合診療の幅を拡大し地域の小児医療に貢献します。1) 内因系・外因系疾患を問わないER型小児救急をトリアージナースとともに実践し、常時小児救急患者を受け入れています。2) 最善の医療のため多職種によるチーム医療を実践します。3) 健診（院内外）および予防接種の実施など小児保健診療へ参加します。4) 1次医療機関、3次医療機関、消防局、保健所、児童相談所、千葉市医師会など他の関連機関、院内他科と円滑な連携をし、地域医療を支援します。5) 地域の小児食物アレルギー診療の基盤となるよう、食物経口負荷試験を実施します。6) 小児科専門研修基幹施設として小児科専攻医を指導・育成します。7) 公開カンファレンスを開催して地域の小児医療の質向上に貢献します。8) 初期研修医と医学生の研修・実習施設としても充実を図ります。

2. 勤務体制とスタッフ

①勤務体制

小児科医が小児救急患者を 365 日 24 時間体制で変わらず受け入れています。働き方改革により、これまでの日直・当直制度から、日勤・夜勤の制度も導入しており、夜間、土日、祝日については、日直（日勤）・当直（夜勤）の小児科医が担当し、常時小児科医が在院する体制を維持しています。日中は救急当番の小児科医が迅速に対応をしています。17 時から 21 時までの千葉市夜間応急診療を含む救急外来において、小児専従看護師が院内トリアージを実施し、救急外来の適正化を図っています。緊急性が高い患者は、当科の医師が、日・祝日は小児科救急外来担当医師が対応します。千葉市夜間応急診療の前準夜帯を週 2 回月曜日と水曜日（第 1 月曜日を除く）に小児科専攻医が担当しています。

②スタッフ

令和 6 年 4 月 1 日時点

副院長・小児科	金澤 正樹
統括部長（成人先天性兼務）	立野 滋
統括部長	杉田 恵美
部長	小野 真
部長	江畑 亮太
部長	高田 展行
部長	加藤 いづみ
部長	森山 陽子
統括部長（感染症内科兼務）	吉田 未識
主任医長	鋪野 歩
医長	深野 優帆
医長	吉本 拓郎
医長	家村 綾正
医長	多湖 孟裕
医長	吉野 忠恕
医長	小泉 和久
医師（教育担当）	寺井 勝
専攻医	井上 佳奈
専攻医	原田 友梨

専攻医	西川 翼
専攻医	武口 航
専攻医	田中 華鈴
専攻医	小林 裕一
専攻医	新井 和樹
専攻医	古野 秀裕

栗原 恵理佳医師、小玉 隆裕医師の退職があり、家村 綾正医師の赴任があった。
小児科専攻医については、小児科専門研修のプログラムに沿い、異動があった。

③外来（令和 6 年 4 月 1 日時点）

専門外来

月曜：高田展行（循環器）、千葉大医師（内分泌）、齋藤江里子（小児外科）

火曜：内田智子（神経）、寺井勝・立野滋（循環器）、光永哲也（小児外科）、田中絵里子（小児腎臓）、高柳正樹（遺伝）

水曜：田邊雄三・高梨潤一（神経）

木曜：寺井 勝（循環器）、橋本祐至（神経）金澤正樹（代謝・消化器）

金曜：寺井 勝・立野滋（循環器）、加藤いづみ（アレルギー）、光永 哲也（小児外科）
千葉県こども病院医師（整形外科）

小児一般外来

杉田恵美、森山陽子、鋪野歩、深野優帆 他

3. 診療実績

外来延べ患者数：21083 人（初診：6557 人、再診：14526 人）、紹介患者数：1798 人

新規入院患者数

新規入院患者数	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
小児科	1461	1825	1748	2321	2473

救急車搬送受入数

	令和 2 年度	令和 3 年度	令和 4 年度	令和 5 年度	令和 6 年度
小児科	1,127	1,586	2249	2904	2201
小児科夜急診	188	262	504	584	425
小児科総数	1315	1848	2753	3488	2626

〈主な入院患者の疾患別内訳〉

令和 6 年度は、RS ウイルス感染症を含む気道感染による入院が多くみられた。RS ウイルス感染症は、例年より早い段階で春先から流行がみられ始めたこと、また近年では珍しく 1 月から 3 月にかけての流行もみられたためか、全国的に大流行となった令和 5 年度を 3 倍近く上回る 155 名の入院があった。ヒトメタニューモウイルス感染症による入院はほぼ同数の 32 名、COVID-19 による入院は 25 名とやや増加、他の気道ウイルス感染や細菌二次感染の合併もあり気道感染症による入院が増加した。百日咳による入院が数名あった。

川崎病による入院が 113 名と過去最大となった前年度より減少した。

食物経口負荷試験検査は 681 件とコロナ禍以前の件数に戻ってきており、内因系以外の疾患におい

ては、頭部外傷や薬物誤用による入院が増加傾向であった。

4. 教育・研修・その他の活動

①教育・研修

日本専門医機構が承認する、小児科専門研修プログラム（基幹型）病院として小児科専攻医の専門研修を実施しています。令和6年度本院採用の小児科専攻医は5名でした。

初期研修医延べ25名、小児科専攻医・後期研修医延べ12名の小児科研修が実施されました。千葉大学医学部学生9名の小児科実習を行ないました。令和6年度末で千葉市小児科医会と共催している海浜病院公開カンファレンスは290回を迎えました。

新型コロナウイルス感染症流行の頃からオンライン形式としていた公開カンファレンスは、令和6年度からは対面式に戻し、オンライン以上の活発な質疑応答がみられました。

②その他の活動

市原市の時間外小児2次救急輪番を火曜日と日曜日直、第2・4日曜夜間を担当しました。

千葉市の4か月健診、大網白里市の4か月健診、学校心疾患二次検診に参加しました。千葉市各区の要保護児童対策及びDV防止地域協議会実務者会議に参加しました。

5. 1年間の総括

新規入院患者数は前年を上回り、2473人と過去5年で最多となりました。

入院数は毎年、感染症の流行状況による影響を受けますが、前年度全国的に大流行したRSウイルス感染症による入院が令和6年度も増加傾向でした。今年度の流行期が2度あったこともあり年間通じて入院がある印象でした。

全国的にも増加している百日咳では、ワクチン未接種児は重症化傾向があり、呼吸器管理や集中治療が必要な症例がみられました。

救急車搬送受入数は開院以来最多となった令和5年度より減少したものの、コロナ禍で減少し、以降徐々に増加していた令和4年度と同等の2626件でした。

呼吸障害や低酸素血症、感染による発熱に伴う有熱時けいれんに加えて、落下事故等による頭部打撲など外傷による救急搬送も増加傾向となっています。

若年者での増加が指摘されている神経性食思不振症や意図的な薬物過量内服、心因反応による受診や入院も増加しています。児童精神科の非常勤医や心理士、ソーシャルワーカーなど他職種を含めた「こどものこころ診療チーム」として診療にあたっております。

当院で小児科専攻医・後期研修医を希望する医師のへの病院説明会を、令和6年度も引き続き現地とオンラインのハイブリッド形式で実施し、定員での応募がありました。

6. 今後の目標

2026年秋に開院予定の新病院では、救急科と連携して、ER型救急をさらに充実し、重症児の管理も診療体制が整備され、向上される予定です。また高速道路からのアクセスが良好となり、ヘリポートが設置され、より広域な地域からの小児救急患者の受け入れが可能と考えております。

令和6年度からの医師の働き方改革への対応と、時間外の救急対応を不安なく行っていくためには、小児科医を目指す若手医師の教育や医師の確保が重要であると考えます。また、新病院では病床管理や感染対策をしっかりと行い、これまで対応できなかった症例においても入院対応が可能となるようつとめます。

次世代の小児医療を担う医師を育成するため、小児科専門研修施設としてよりいっそうの充実を図り、小児科専攻医・後期研修医の確保、指導を行っていきます。

流行する感染症診療と並行し、今後も多くの救急疾患対応に努め、特に夜間の救急対応においては、小児で対応可能な施設は限られており、小児科医不足である医療圏にも、引き続き目を向け、医療の提供を続ける必要があると考えています。

小児医療において問題となっている、慢性疾患や医療的ケアがある小児の移行期医療や、社会的養

護を要する貧困や虐待などの対応、重症心身障がい児者のケア、発達障害・精神・行動・心身医学的な診療に対し、地域の需要に応えられるように引き続き整備していきます。先天性心疾患の移行期医療では、県内唯一の先天性心疾患専門医総合修練施設であり、様々な診療部門のみならず多施設との連携を行い、診療体制を構築していきます。

小児科 HP : http://www.city.chiba.jp/byoin/kaihin/shinryou_syounika.html

海浜病院リクルートサイト : <http://chibacity-kaihinhp-recruit.jp/>